

着実に前進の息吹を感じた長洞再訪

被災地市民交流会 垂水英司

集会所の壁には資料がいっぱい

長洞地区は岩手県陸前高田市の中心市街地から南東 7 キロ、広田半島の付け根にある海に面する小さな集落だ。元々は広田町であったが、1955 年 3 町 5 村が合併して陸前高田市となった。

長洞地区を訪問するのは 2 度目になる。(10 月 15 日) 最初来たのは 7 月で、これまで神戸と被災地交流を進めてきた台湾の新故郷文教基金会の廖嘉展さん達と一緒に。実は、長洞地区の自治会副会長の村上誠二さんと廖嘉展さんが、6 月 26 日放送の NHK 衛星番組「地球アゴラ」(地域リーダーと復興) で共に出演した縁で



集会所の壁に貼られた奥尻島視察記録

訪問することになったものだ。その時は、たくさんの集落の方に出迎えていただいたのだが、今回は村上さんお一人である。その後の経過や前回聞きもらしたことに加え、村上さんご自身の体験も聞いてみたいと思っていた。

3 時の約束が 10 分ほど遅刻して到着。集会所に一人村上さんが待っていてくださった。集会所の部屋の壁に貼ってある活動記録や資料が、前回に比べ随分増えている。復興は少しずつだが、着実に前へ進んでいる。そうした雰囲気は自然に伝わってくる。

勤め先の中学校が避難所に

私は一息ついてから切り出した。長洞地区のある広田半島は津波で孤立したんですね？村上さんは静かだが、重い口調で語ってくださった。「私は震災当時、勤め先である陸前高田市街地の少し高台にある第 1 中学校にいたんです。そこで流される住宅も見だし、津波に巻き込まれた人の悲鳴も聞きました。中学校にも 1,000 人ぐらいの市民が避難してきました。その中には泥からはい出してきたお年寄りや子



陸前高田市

供たちも…。そして骨折している人も…。あの日は寒かったしね。まるで地獄絵でしたよ。」

「第1中学校の子どもたちについて言うと、全校生徒 298 名のうち、両親を亡くした生徒が5名、片親を亡くした生徒が45名という状況です。157名の生徒の自宅が全壊でした。半数以上の生徒の家が流されたのですよ。」

とにかく情報がなかった。避難してきた人達から状況を聞いて、それを地図に落として繋いでいった。だけど、長洞がどうなっているのかはわからなかった。結局その夜は帰れず、あくる日行ける所まで自動車で行き、その後は歩いてなんとか長洞へたどり着いたという。幸い、集落で死者は出なかった。しかし、60世帯のうち低地に住んでいた28世帯の住宅が津波で流されたのである。

集落内で分散避難

家を失った世帯は、無事だった高台の方の家にそれぞれ分散避難した。これは都市部では考えられない避難方式だ。他の集落でもこうした助け合いは一般的なのですか、と思わず質問する。「そうですね、長洞の場合は特別だったかもしれないですね。家を流された世帯と無事だった世帯の数がほぼ同じだったということもあるでしょう。それに集落には田の字型の住宅が多く、普段使わない部屋があるので。集落半分が被害にあったのだから、助け合うのは自然な形です。誰がどこの家に行くか、これも自然の流れで決まっていたのですよ。集落の絆です。」なるほど。集落というのは、コミュニティといった横文字で言い尽くせない、様々な人間関係や長い時間が凝縮された生活空間なのだろう。



震災後の長洞地区・右側の低地の家が流失し、左側の高台の家に分散避難した。航空写真は Google

集落内の仮設に全員入居—「長洞元氣村」

震災後、村上誠二さんはじっとしていなかった。地域の学校再開の見通しがなかなか立たなかったのをみて、元中学教諭だった奥さん等とともに、民家を間借りして子どもたち

のために寺子屋のようなものを開設した。「長洞元気学校」だ。学校が再開するまでの間（3.23～4.16）、30人ほどの地域の子どもたちが集まってきた。

さらに、仮設住宅も自前で作ろうと発意し、集落内の地主さんと交渉の末、用地の無償使用の承諾を得た。ところが、岩手県は当初、「応急仮設住宅は公有地に」という原則を崩さない構えだった。しかし、粘り強く交渉した結果、4月25日県は集落の仮設住宅を認め、建設が実現することになった。

これは、マスコミや外部の専門家の力も大きかったと思う、と村上さんは明かす。4月2日のNHKテレビ番組「ニュース深読み」で、住民自ら様々な取り組みをしている長洞集落が紹介された。また、東京の仮設市街地研究会（代表・濱田甚三郎）が長洞集落の結束した取り組みを知って、大いに注目し全面的支援を申し出た。仮設住宅をめぐる交渉にも、貴重なアドバイスを提供してもらった。こうしたなか、5月9日から仮設住宅用地の造成工事が始まり、6月5日には建設工事に着手したのである。

ところが仮設住宅の入居は一般抽選が建前ということだった。それは納得できませんでしたね、と村上さんは振り返る。そこで、集落で被災した人の申込書を全部まとめ、それに要望書を付けて県に提出した。結果は全員当選となり、ともかく一緒に入居することが実現した。「長洞元気村」と命名、7月17日には開村式を行った。



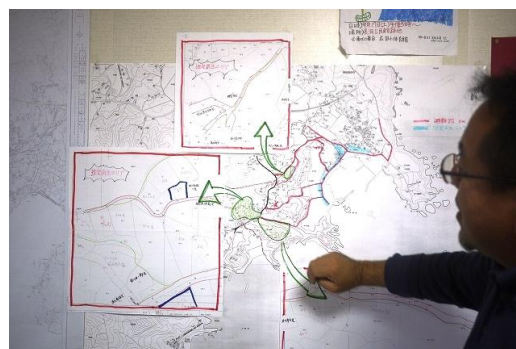
長洞の子どもたちが作った復興のシンボル「長洞大漁旗ががんばっぺし」が出迎えてくれる。

復興の話し合いもこれから佳境に

一方、復興の話し合いも、5月31日長洞地区全戸集会を開いたころから始まった。8月7日には、長洞部落会通常総会で「高台移転・避難路拡充・港湾復旧」の要望を決議した。8月30日には第1回長洞集落復興懇談会を開催し、本格的な検討に入った。この懇談会には、元気村の住民の他に、仮設市街地研究会・県振興局・県建築士会などからも参加する。懇談会での検討に使った図面が集会所の壁に貼ってあった。村上さんは起ちあがって、その図面を指しながら説明してくださった。

図面には3か所ほどの高台候補地が書かれている。その土地所有者とおぼしき名前も書いてある。へー、もう地主さんも調べてるんですねとの問いに、村上さんは「皆知ってるからね。そこはAさんの土地だべ。こっちはBさんだべと言いながら作ったんですよ。」そうか。そうなんだ。ここでは地に足着いた議論がされている。

9月26日から、村上さんなど数人のメンバーで、津波被害の先行事例の復興経験を学ぶため北海道の奥尻を訪問した。10月2日には第2回長洞集落復興懇談会を開催、基本方針・復興方針を確認した。そして、10月中に地権者の意向を調査し、高台移転の候補地を絞っていくということだ。これからの議論の展開に注目したい。



壁に貼られた図面で説明する村上さん

海が好きなんだ

私には、もう一つ確かめておきたいことがあった。集落の生業である漁業の復興の様子だ。この辺りの事情は、知識も実感も極めて乏しい。集落で漁業に携わっておられるのはどのくらいですか、そんなことから尋ねてみる。「震災前、漁業の専門家は10人でした。その他に兼業の人もいるので、まあ集落の7、8割が漁に関係しているといっていでしょう。」ということだ。アワビとウニで年200万円くらい、ワカメで500万~1,000万くらいの水揚げも見込める。決してやっていけないわけではない。

しかし、今回の津波で、船から漁具、養殖施設まで全部流された。そして、高齢の人も多い。もうこの際やめようという人がでてくる。「10人の専門家は4人に減るのですよ。ほとんど、50代、60代です。」と村上さん。「いや、5人かな。実は、私も始めようと思っているんです。」えっ、そうなんですか。あー、みんな海が好きなんだ。確実に後継者の当てがあるわけでもない。縮小しながらも、やれる限り海の仕事に精一杯続けることが、一人一人の復興につながる。漁業復興については様々な議論があるが、急いで将来像を探し求めるだけが復興ではない。よく解らないながらも、そんな気持ちを抱かせられた。

廖さんたちは蝶に夢中

「廖さん達も最近は蝶の保護活動に夢中ですよ」と、台湾の近況を伝える。「その内、必ず行くとお伝えくださいね。」と村上さん。

外を見ると、もう暗くなる寸前だ。少し、現地の様子を再確認して御暇することに。

では、又来ます。



蝶の生態保護のため密源植物を植えた後、記念撮影するボランティアたち（台湾・埔里）
写真提供・新故郷文教基金会